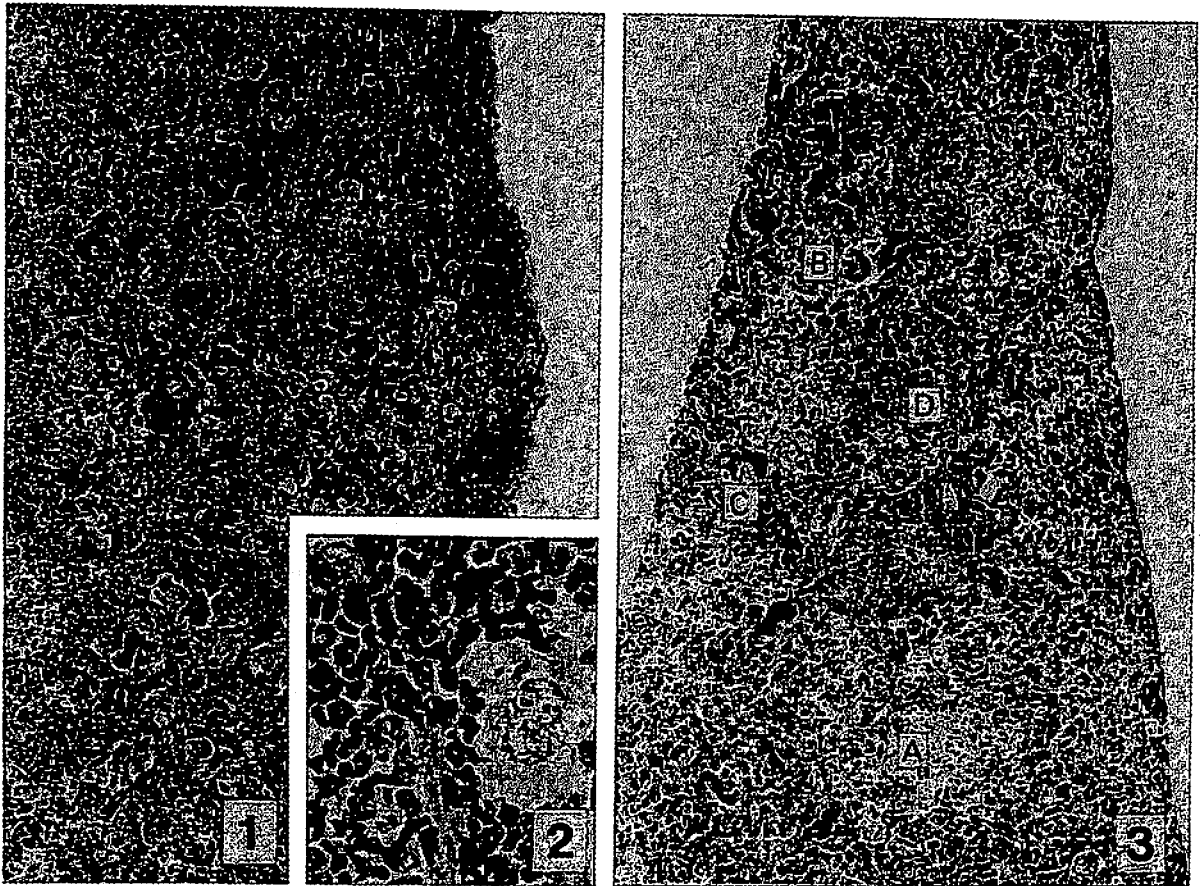


# マウス脾および肝

東京大学医科学研究所獣医学研究部出題 第18回獣医病理学研修会標本No.289



動物：ヌード (BALB/c, <sup>nu</sup>/nu) マウス♂。

病歴・剖検所見：1977年9月某大学実験動物繁殖施設でヌード (nu/nu) マウスのいわゆる wasting disease が発生し多数が死亡した。若干の検査例が同齢のヘテロ (nu/+) マウスとともにわれわれの研究室に送付されたが、本例は剖検時全身にわたり消瘦著明で、体脂肪をほとんど認めなかった。脾は高度に腫大し濾胞はやや不明瞭であった。肝表面は顆粒状を呈し、限界不明瞭な白変部が多数認められたが、他の臓器には肉眼的に変化を認めなかった。血清学的検索ではnu/+マウスの一部にマウス肝炎ウイルス (MHV) およびセンダイウイルスに対する補体結合抗体を検出した。

病理組織学的所見：脾では白脾髄が萎縮し、リンパ球、細網細胞の変性が散見された。また中心動脈周囲にはプラズマ細胞の集簇が認められた。赤脾髄は高度に拡大し、顆粒球系の幼若細胞がほとんどを占め (図1)、また幼若な骨髄巨核球も多数出現していた (図2)。骨髄巨核球の核濃縮、核崩壊、小型細胞による巨細胞形成とその変性も散

見された。赤芽球系と思われる細胞の増加も見られ、造血は被膜直下ならびに脾柱周囲で特に顕著に見られた。

肝では巣状壊死巣が多数認められ (図3-A)、好酸性小体の発現もあった。巨細胞形成 (図3-B) とその変性像 (図3-C) もみられ、壊死巣周囲の変性肝細胞および巨細胞中には免疫蛍光法によりMHV抗原が検出された。壊死巣における細胞反応は軽度であったが、それとは別に類洞内および血管周囲には顆粒球造血が認められた (図3-D)。その他骨髄では低形成、変性、壊死、および巨細胞形成が広汎に認められた。

病変の認められた肝および脾からMHVが分離され、そのnu/nuマウス接種により本例と同様の症状、病変が再現可能であったので、本例の病変はMHVの感染に関連して生じたものであると考えられる。ヒトにおける、脾の腫大と骨髄巨核球の増加をともなった肝・脾における広汎な髄外造血との類似性をも考えて、つぎのように診断された：マウス肝炎ウイルス感染に関連した hepatosplenic myelosis.